

皆様、本日はお忙しい中お越しいただき、ありがとうございます。

きらめき農業塾運営の十年を振り返り、私は大きく二つの期間があったと感じています。

最初の五年は「準備の五年」人や組織の仕組みと向き合い、土台を整える時間でした。

次の五年は「実働の五年」自分たちの未熟さを痛感しながらも、経験を積み少しずつ成熟を実感し、地域全体の底上げに取り組んできた五年間でした。

その中で、私がずっと考えてきたことがあります。

それは、人材育成は、農業と全く同じだということです。

私は、この五年間、指導農家として、やる気のある人を集め、きっかけという「種」を蒔き、考え方という「水」を与え、新芽が出るところまで育ててきました。

基礎を学び、「自分の農業と向き合おう」と立ち上がるまで、そこまでは、やってきたつもりです。しかし、気づいたことがあります。

野菜は、芽が出ただけでは育ちません。

その後の水管理、除草、施肥、暑さ寒さから守ること。

植物の生命力に寄り添いながら、必要な手を打ち続ける。

農家にとっては当たり前の工程です。

では、人に対してはどうだったか。芽が出た後、十分に寄り添えていたか。種を蒔くことに力を使わず、その後が手薄になっていないか。

これまでの取り組みは間違いなく大切な「入口」でした。ですが、その入口に負担が集中しすぎたことも事実です。

農業は、播種から収穫まで管理し、収穫後も調整、販売、経営まで繋げて初めて再生産が可能になります。人材育成も同じで、入口だけでは持続しない。これが現場に立ち見えてきた実感です。

だからこそ、これからの五年は「芽が出たあとの寄り添い」ここを最も大切にしたいと考えます。そのためには、一部の人や組織だけが抱える仕組みでは限界があります。

地域全体で役割りを分担し、それぞれの組織の中に育成を担う人がいる形が必要です。

将来的には、現在のきらめき農業塾事務局機能を解体し、担い手育成の「サポートデスク」としての役割を残しながら、相談機能は市、農協、府、農業委員会などへ分散していく。

研修の受け入れや、その後の伴走支援は、これまで通り農家が担う。

現場に寄り添えるのは、やはり現場を知る農家です。

可能であれば、基礎課程に係る費用を抑え、その分「アフターフォロー」を充実したい。

目指すは、生産の担い手を増やすことだけではありません。

人を多面的に育てる地域の仕組みを作ること。

地域農業の衰退を食い止め、持続可能な農業へ繋げること。

農家の強みは何か

それは、寄り添い続けられることだと思います。

私たちが野菜にしていることを、これからは人にもしていく。その仕組みを地域で作っていく。それが、次の五年の挑戦です。

本日はありがとうございます。